

繪本三國妖婦傳

下編

三

^ 13
2892
13



繪本三國妖婦傳下偏卷之三

目錄

狐人氏城傷ふ 八郎上系して夏事城奏す

狐人畜城害一食小圖

八郎再び野千将して狐穴城出牙圖

八郎が妻俄よお人となる圖

へ 13
2892
13

三國妖婦傳一巻目録

公卿泰親城をて評決の圖

八郎神流城推乃て下ふまゝの圖

狐泰親に化八郎城御も山を尾を以て化せし

八郎山を尾城推泰親が正體城見る圖

八郎泰親に化一狐城斬圖

繪本三國妖婦傳下偏卷之三

目録

狐人民城傷八郎と系て妻奉城奏す

狐人畜城害一食の圖

八郎再び野干将て狐穴城空牙圖

八郎が妻俄よお人となすの圖

三國妖婦傳一巻目録

公卿泰親被召て評議の圖

八郎神流被推して下まきり圖

狐泰親に化し八郎被推して山宮被尾を以て化生と云

八郎山宮被尾被推泰親が正體被見る圖

八郎泰親に化し狐被斬圖

繪本三國女婦傳下編卷之三

狐人民を傷み八郎上京して変事を奏す

昭和九年七月三日 購末

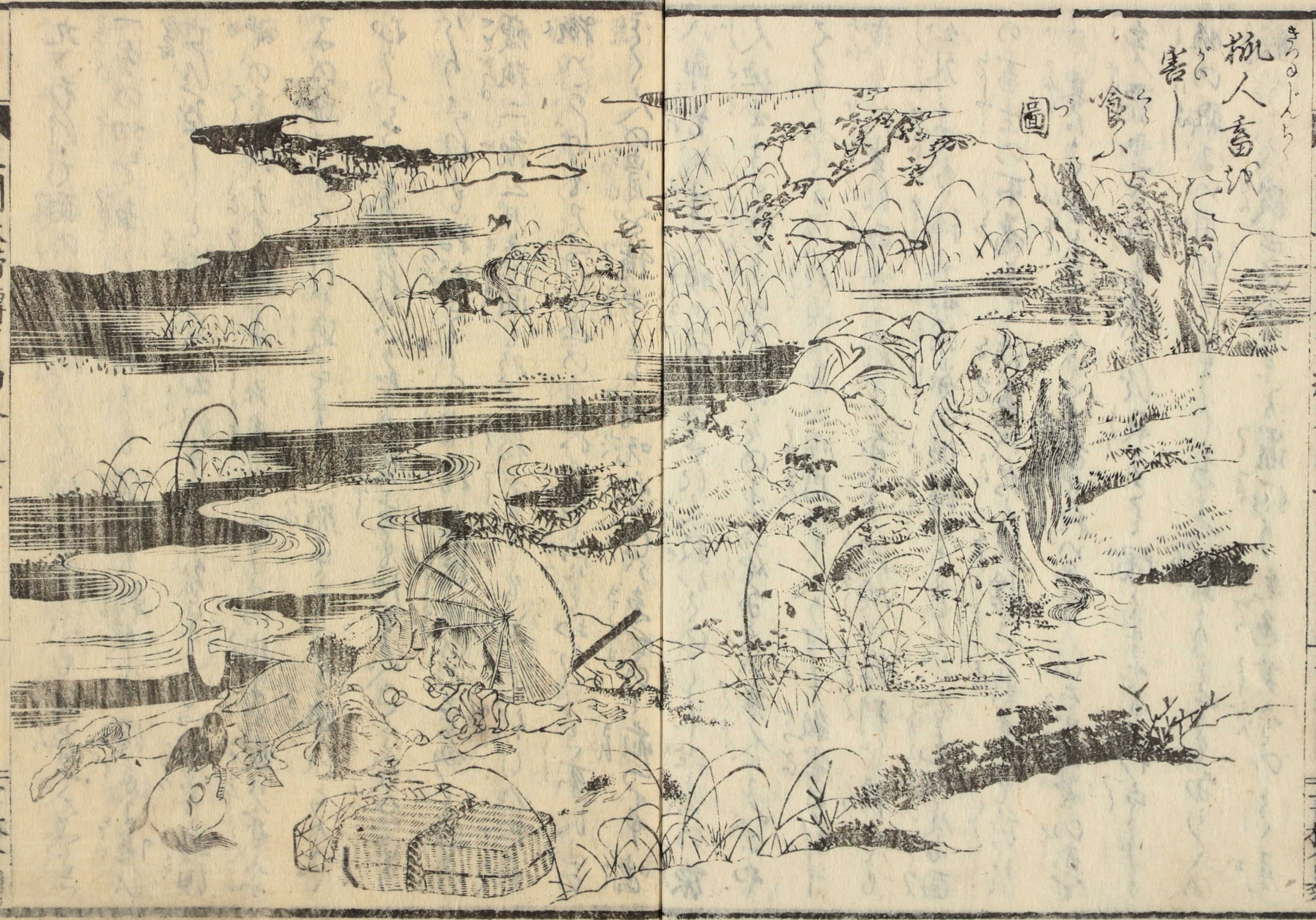
登中

ぬも九尾の狐へ今上被内惚ありめとて不王威を傳人とい
かりし不炳然しる神國の大日本いそ魔魅の力よと云
傳人被忠義に播磨守安倍泰親易たの功被りし
尺取神力の冥助を借し禁庭被逐し下河國
那須野に遁まき去り分被潜めりる唐天皇に賢士召し
乃為に迎れ又竹をさすもなきてや方被被之て往來の
人被取合ひし是より此系にかつれて老若男女のさし
いし往來乃被人又ハ遠迎の民家に入て會新乃

差別なくありし害一食いありし冷りて隠し
 目く小害せし人々之の限あるまじき事なりて
 人民の亂を絶さんとして今ハ順を以て之も厭む
 宗順八節宗重が家来婦女妻子等なく失ふもの
 多し一是の悪報の取らんと思ふとせざるもかく八節
 齒へて或る一無念と怒まじも被り才兼深き一合性
 やり方なり一何ハ八節順分の民百姓も言初のや一人
 二八たまりく小えつざるもの、何ありらるるを以て一日
 二十人二十人の存絶を言なく又母或ハ妻子兄弟嫁娶是
 が是の比彼がうや一と日毎の泊進程の齒爪拂ふ似たり
 八節是証せて順内のもので人教かくのど一往來の旅
 人他まき順からがいのものあり死するハ幾人たりとや
 ころりあるまじき順八節が順内より人々一殺害され一
 或は化生に取捨され一を、他順の評判を諺へも
 公外より減る順家の振擲くは是るか合先九尾白面
 の畜生の取為りて汚名氏人ハ惜しむ熱までも絶は
 外畧りく無念いんこともおられぬとて比宗順中の系を
 多難ありても減らば取りて隔くまでも精々一
 悔の難よの目成しけまじと多し極なりともありくの
 形なき殺し入るる環行り危色英令のどく尾

きりのとんり
瓶人畜
害

圖



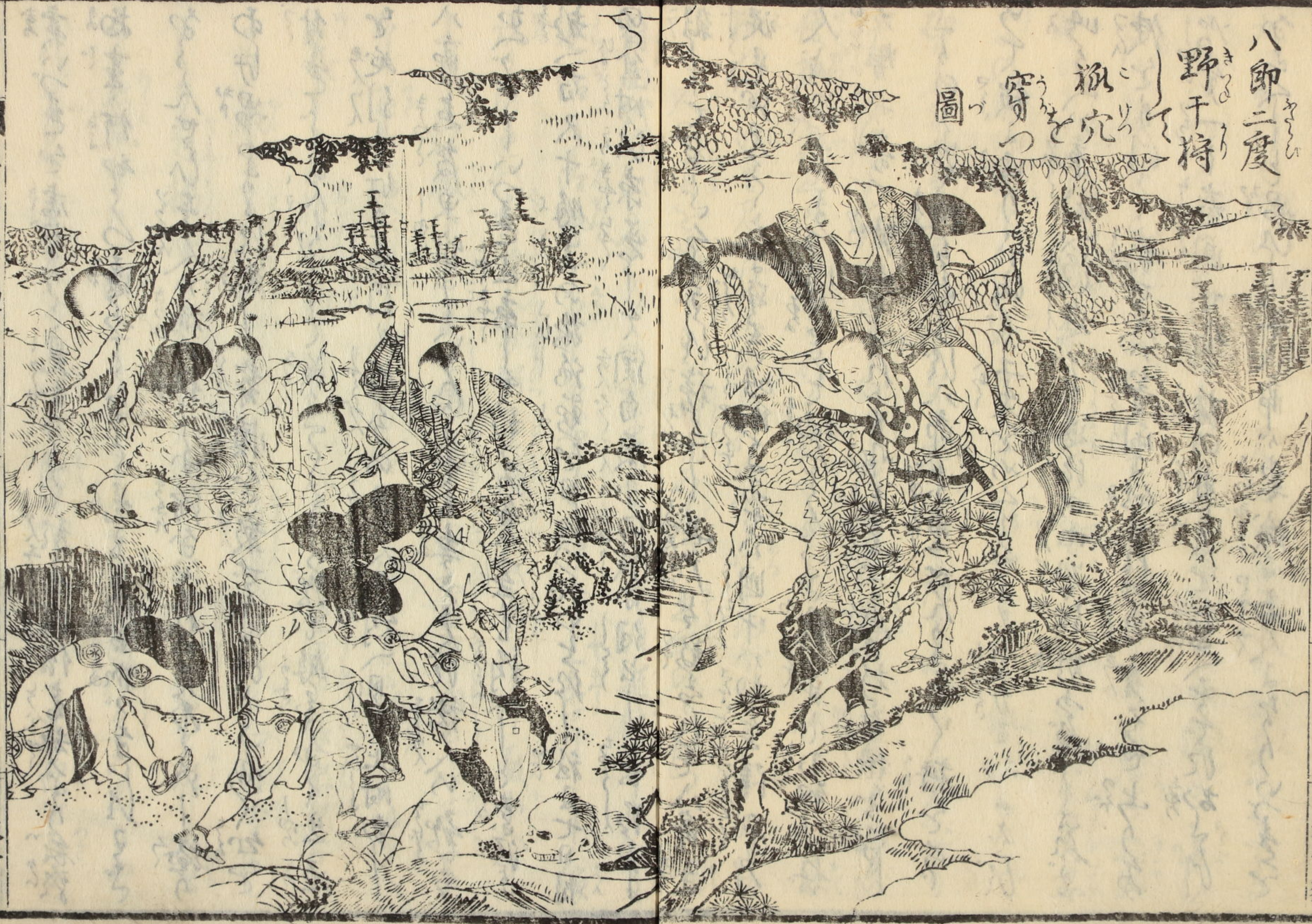
九つあつて面の白き極く足ばいりも取書てくさ
 一分の功を多し射しも寝も斬しも得ては
 亡び度しと御子の乞ひをせりもに座き極
 神の系派大人教まで巻つ舞子の内は親兄弟
 子の敵の極やれば遊さまと御さまと遊しんぞ
 ひふも多かれがいらる魔生もたまふとくは
 けりされも持出さる唯指鹿猿鬼のこをぬく
 瘦極二夜三日透間も形も持書せもつくりん
 極のうげも足び山の奥れつが空とわがしん
 しく人の骨を積中よと咽呪わしひ急下のと
 解してしむらうらうら後と一其尸と教
 涙は涙とく大は強き此地よあて六國中
 人成候さんまらけ空をも極せんつ
 大勢おきて城くつられも唯毎毎骨お
 ころのしめて極くあつ八郎宗重せん
 つて彼はゆりゆゆと夫をめぐせども
 此うへ糸おつ河邊一退治の
 使をり門く奏せん
 次中一奏聞せん
 おととと思ひ一不八郎が妻はあ人

三國物語 卷之三

三

三國物語

八郎二度
野干將
狐穴
穿つ
圖



實いづを慮なりと見分ぐく顔色風俗者都人衣冠
 物事何ぞの遠あそむく是もりの古物バをしほこぎ
 おんせひま人の靴の化し小物ならんあふへ一縷り
 わげ思ひまの靴一着憤を散せんものところなく心を
 付き下も入らるる正敷くても所も解きあく出立
 を延引しける其内も腹分の美人の物一見し止時を
 八節急度思惟し一いんぐても妻ま人に諸人の靴を
 ぬぐし一いづを上糸をかける妻事も消すと糸源より
 於一百又十餘里の旅路を思ひつれを以て七日目
 の晝対以糸系し一て関白殿下の彼小何と一長路を

對面波らひるくの妻事よめて後進仕あしびよ
 退治乃法勢をとりあやうと願ひんと糸せし一演
 況しはまば秦潭正少弼量満是氏承とけ殿下一
 上りらに殿下忠実公法嫡子内大臣忠通公法又子き
 ち一正色使の廳より出ゆ法あそむる百餘報よひく
 ると一と出接取わりけまは八節宗重男て退散はれ
 より殿下系内あつて八節が後進のむよと今後まし
 くりら起播磨お恭親法よめて正體を殿一を
 くる悉概ならんけしと法をりつて退治の仕方あそむや
 くれはるるそま人も同色物と一とわめて恭親を正色

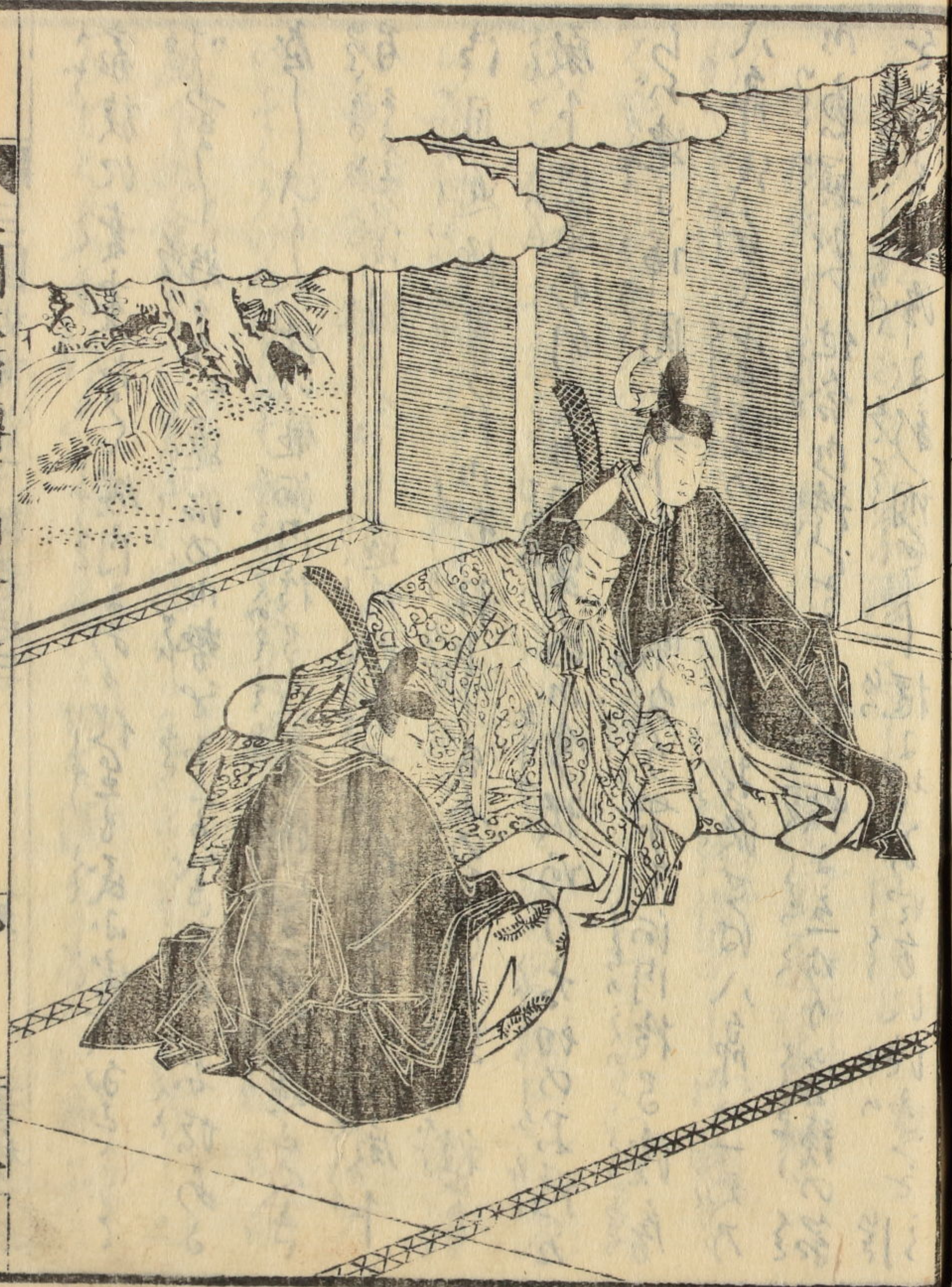


八節が
 つまあう
 妻俄ふ
 二人と
 やる圖



此事既尋之が志はし考て中々るの形頂八帝が妻人
 小なるも一ハ其人ハ概中ら虎も又人かともかこるべ
 人民助けの心慈恵あまが神室のうち室淑のうち一振
 八咫の心鏡のうつり一面のうらいつきありとも八帝おか
 わさのりあまき人の懐婦亡人と掌代さびがど
 悪極退治の事ハ容易あつて是れ英雄の武士を撰
 て勅有る多勢あり概中一害せしむの外ハあつたされ
 とも神通自在の古井千雲波あびを波翔の御ある
 ぢれば地城村のそのあつた浮人と叶比系かこにおも
 ひき法を修し花江流とめ百里の系をも授めし

三聖口方を限り外ハをささるるにけりなむ一さされバ退
 治安くく一彼虚空花江の概中あつた清涼殿少の
 初花江を封禁中一て害せば高射のしく悪業あつたはまき
 どの外外わりし濃くあまを公けり一すに恭祝が
 意見あまらせ徳民救ひのあつたが軽くさかとなれども
 神鏡の末のうつり小なり紙信をせあま評伝一水一
 検淑違使判官河内持守陸房をきてけし誠令せしき
 扱せんより殿下の飯は八帝をり一書長彈正少御量満
 面會一此度せ殿形よよめて室鏡の心写はし一あま条
 是を携つるあま二人の妻一方の妖怪ハ過く及し一をさ



三國姓女作下御書之三
八



公卿
恭親を
仰て
評美
の
國

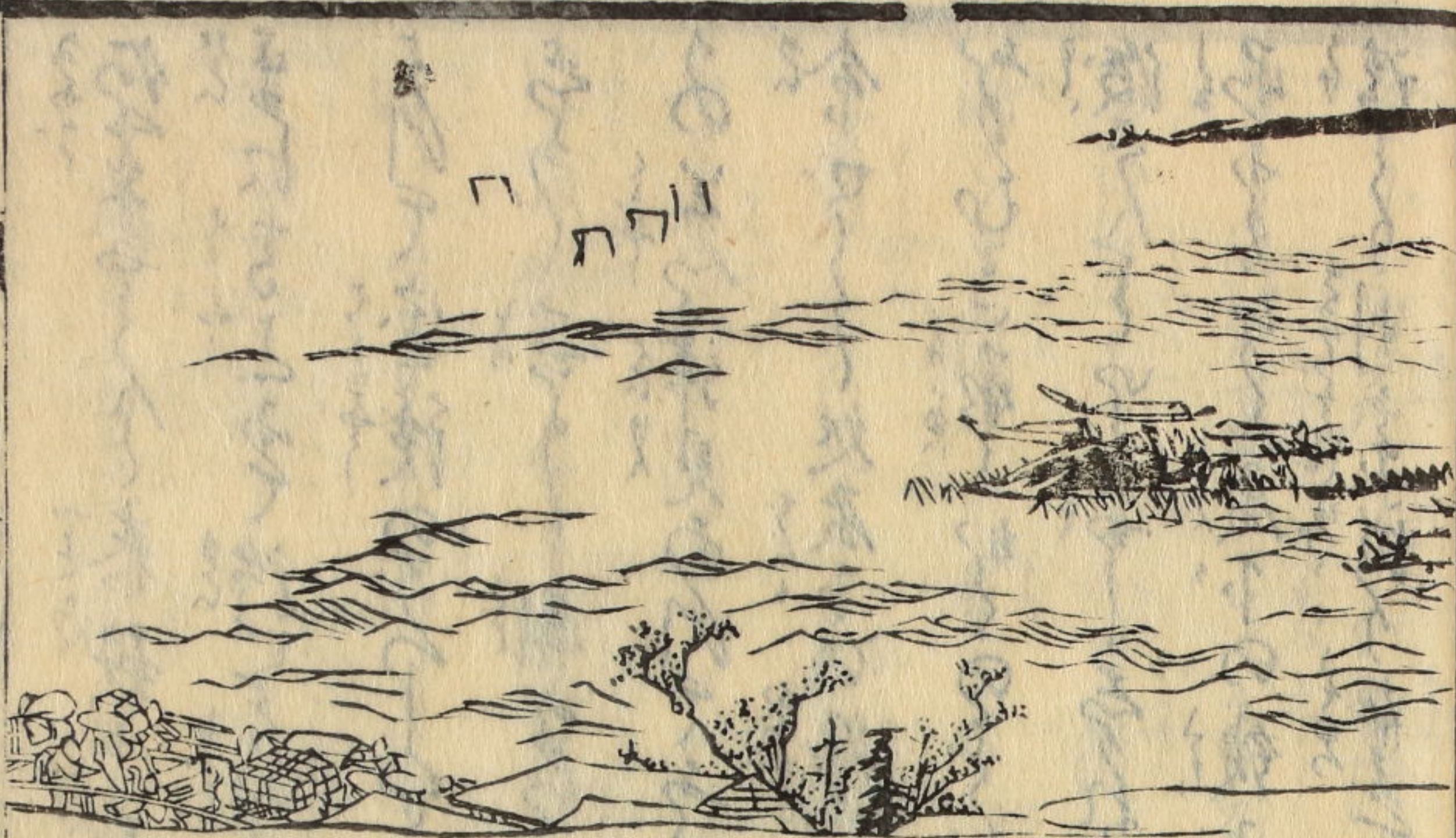
三國姓女作下御書之三
八
書
本
全
類

家族に妻事なく願内よあけ生も民小害成りさうと
 叶ふまど熟くく退治の内勢を下さるべきあれば安堵ある
 ぞ一けり使の雁河内控も陸奥備門よりて遠く遠く
 有るべき遠く遠く一遠く遠く遠く遠く遠く遠く遠く
 法目通作せられ内神理りあつたお達し御さく
 殿卜内遠わのて内丁寧の内命親有り方切の内御
 らば遠く隔国はと一と内服ありあて河内控も陸奥備
 八郎成りて室後の内家一城お渡せば八郎ハ一天乃
 内忠実加の仕合内務をヤ一旅彼よりゆり室後の象
 を控も遠く遠く新調せ一櫃はあつた内河内控も陸奥備

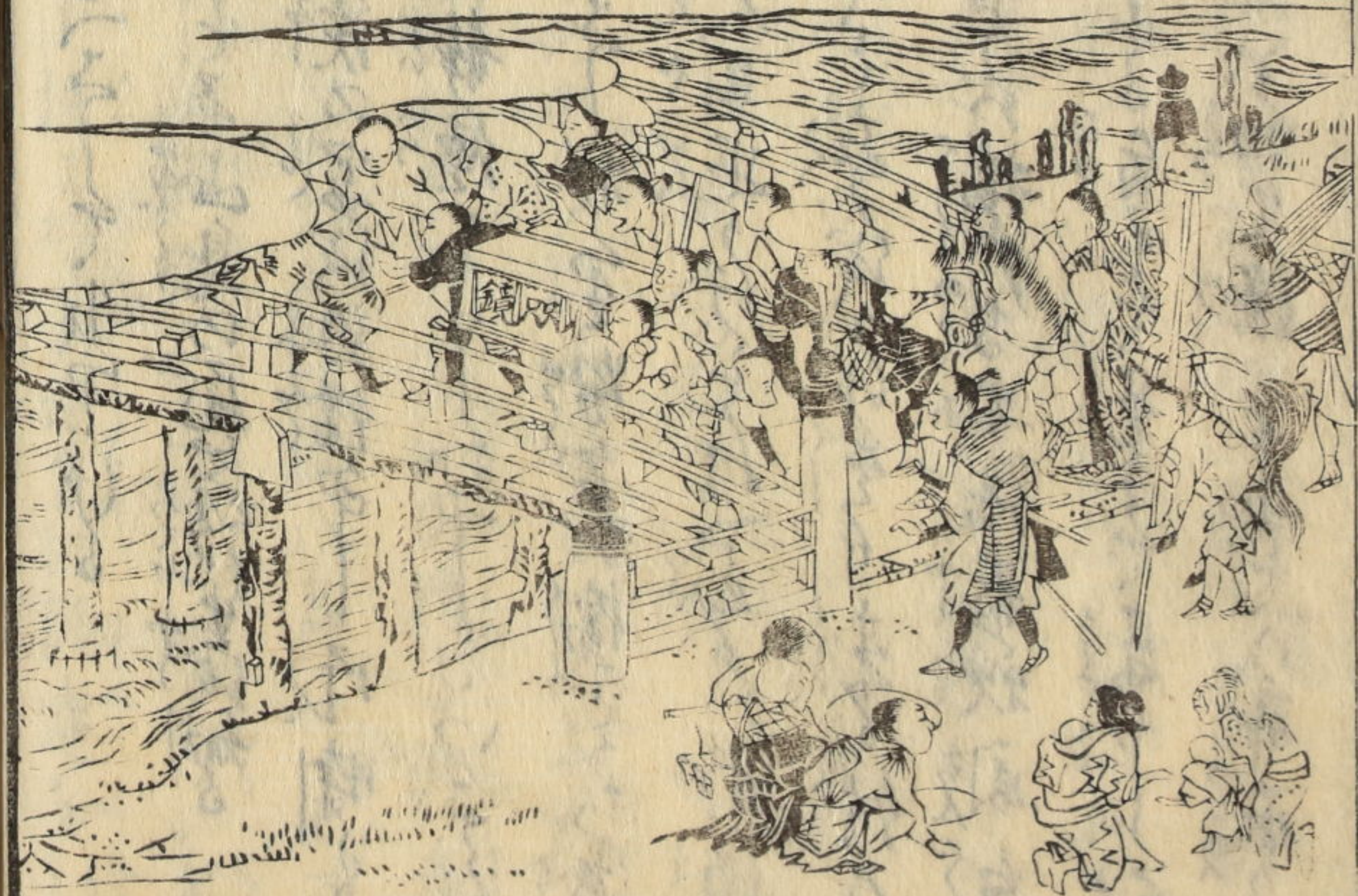
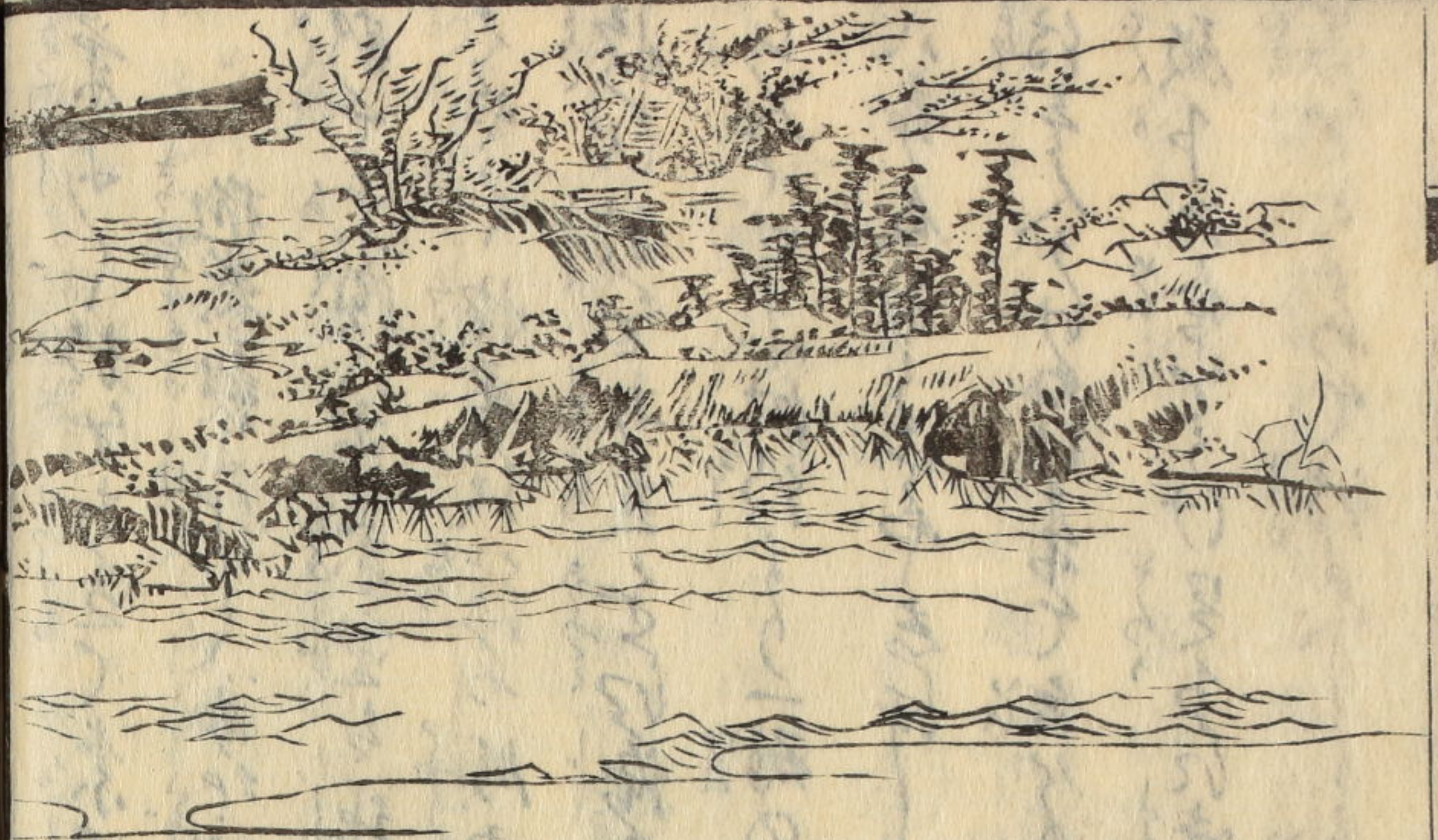
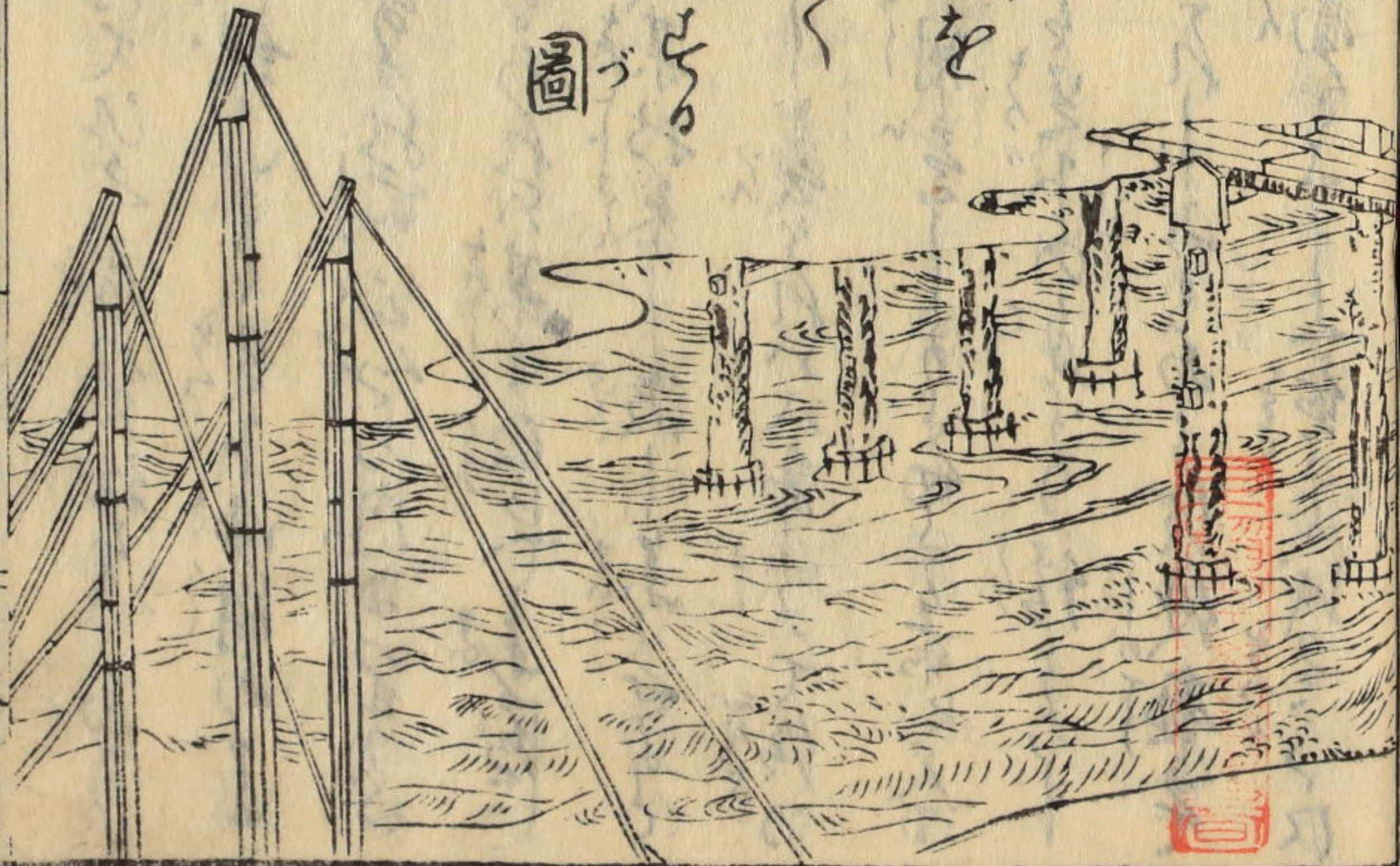
榮子くおを打立て宗源へさしてわすける。

根柢親は化一八郎成りて山鳥の尾を以て化生流知る。

斯く宗源八郎宗重を神流の写流御借あり一斥時も
 なく快異氏流め願内静燈あつたむべしとてさみ
 心びおを打立てをい流よさうか重勢多の橋をうち渡
 らんせし内河内一郡の人馬追ひつれつてあつた形源
 八郎版あつたや志所しとてあつたけり来り流乃
 侍を人けけけあつて云らるる播磨守安倍恭親圓白
 殿卜の命をうけ足下に達する旨をて是まであつた
 事をとめておと一息を切て流るるあつた八郎承り



八節
神鏡を
携へ
歸國する
圖



何事申す人々親がまゝに待つては之を恨むが如く
 生にる上を以て終を以て一糸親かゝるは是下海國あり
 よひて室淡のしづかをして借しあるは公々の内よりまゝ
 ありて其の一團ありてる方もわれが某を取も其の
 の公々深見の門てあつていふ又某持糸一渡一糸を
 命せしは処及下の信之渡さしと云はれは八節まで信の
 ありしにさなかにかくのそと大切不用意しそのそと取く今
 渡らんといふ事あるれども是れ下のみより信より
 ありあはなく及下の被あて渡されしやもわがは使を
 信より判系断りたむ下の書面をさしと云はれは其の
 命す親よりたのむ信じて使をたり是を裁りしと

かねては其の一糸系断りては之を恨むが如く
 ありは下紙のしづかをして借しあるは公々の内よりまゝ
 ありて其の一團ありてる方もわれが某を取も其の
 の公々深見の門てあつていふ又某持糸一渡一糸を
 命せしは処及下の信之渡さしと云はれは八節まで信の
 ありしにさなかにかくのそと大切不用意しそのそと取く今
 渡らんといふ事あるれども是れ下のみより信より
 ありあはなく及下の被あて渡されしやもわがは使を
 信より判系断りたむ下の書面をさしと云はれは其の
 命す親よりたのむ信じて使をたり是を裁りしと
 ありては其の一糸系断りては之を恨むが如く
 ありは下紙のしづかをして借しあるは公々の内よりまゝ
 ありて其の一團ありてる方もわれが某を取も其の
 の公々深見の門てあつていふ又某持糸一渡一糸を
 命せしは処及下の信之渡さしと云はれは八節まで信の
 ありしにさなかにかくのそと大切不用意しそのそと取く今
 渡らんといふ事あるれども是れ下のみより信より
 ありあはなく及下の被あて渡されしやもわがは使を
 信より判系断りたむ下の書面をさしと云はれは其の
 命す親よりたのむ信じて使をたり是を裁りしと

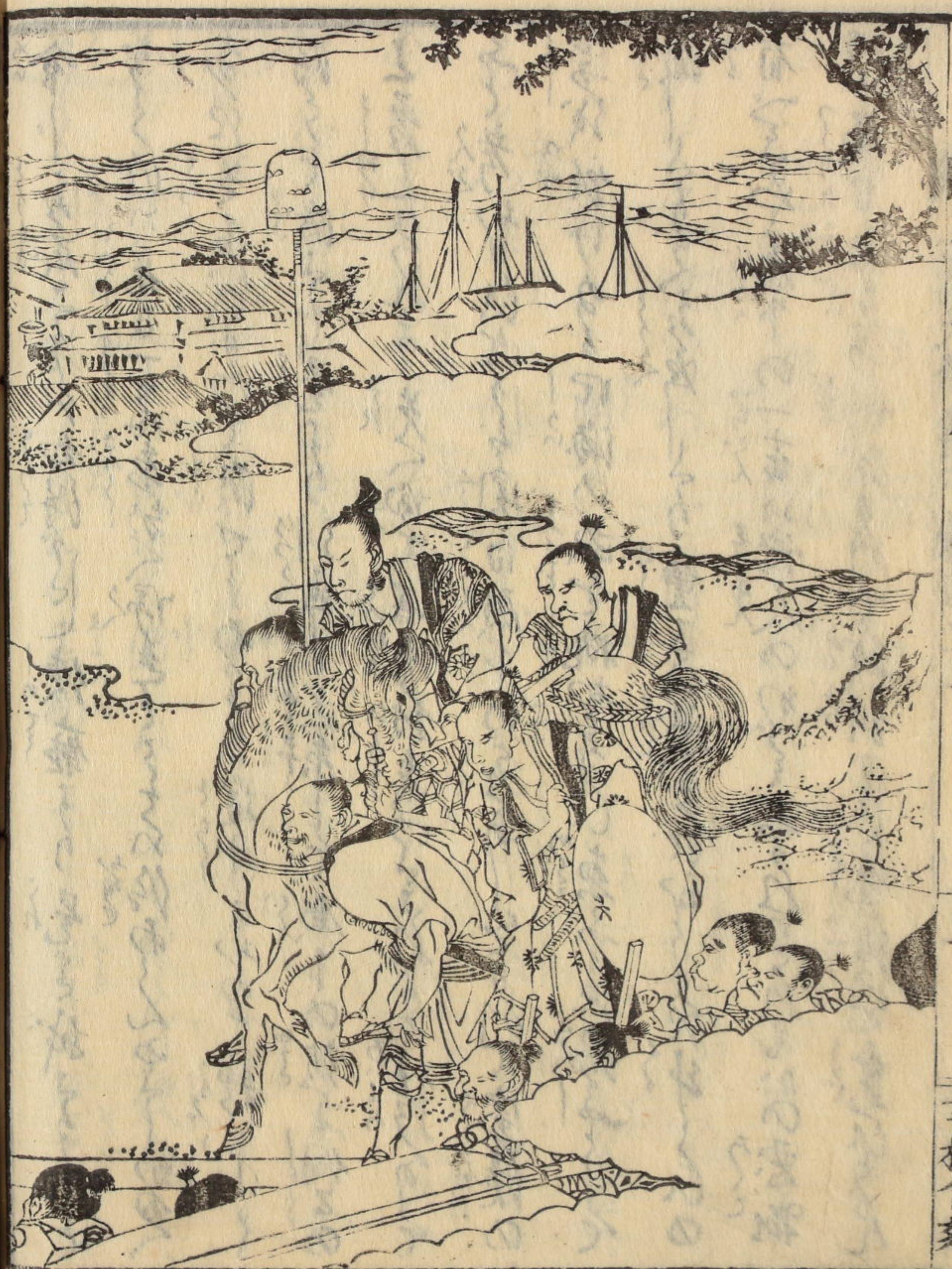
三國志下編卷之三



三

書本合刊

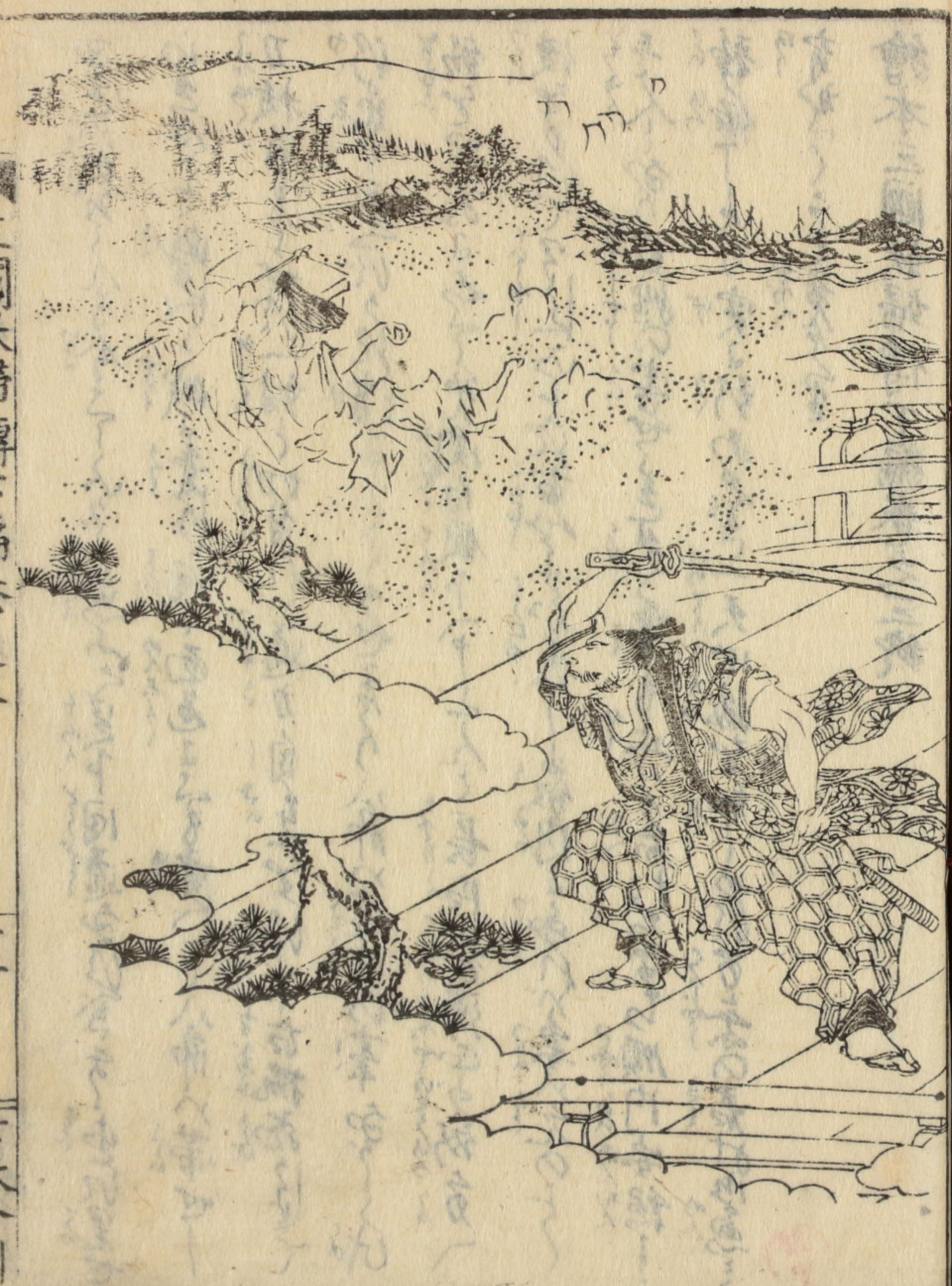
三國志下編卷之三



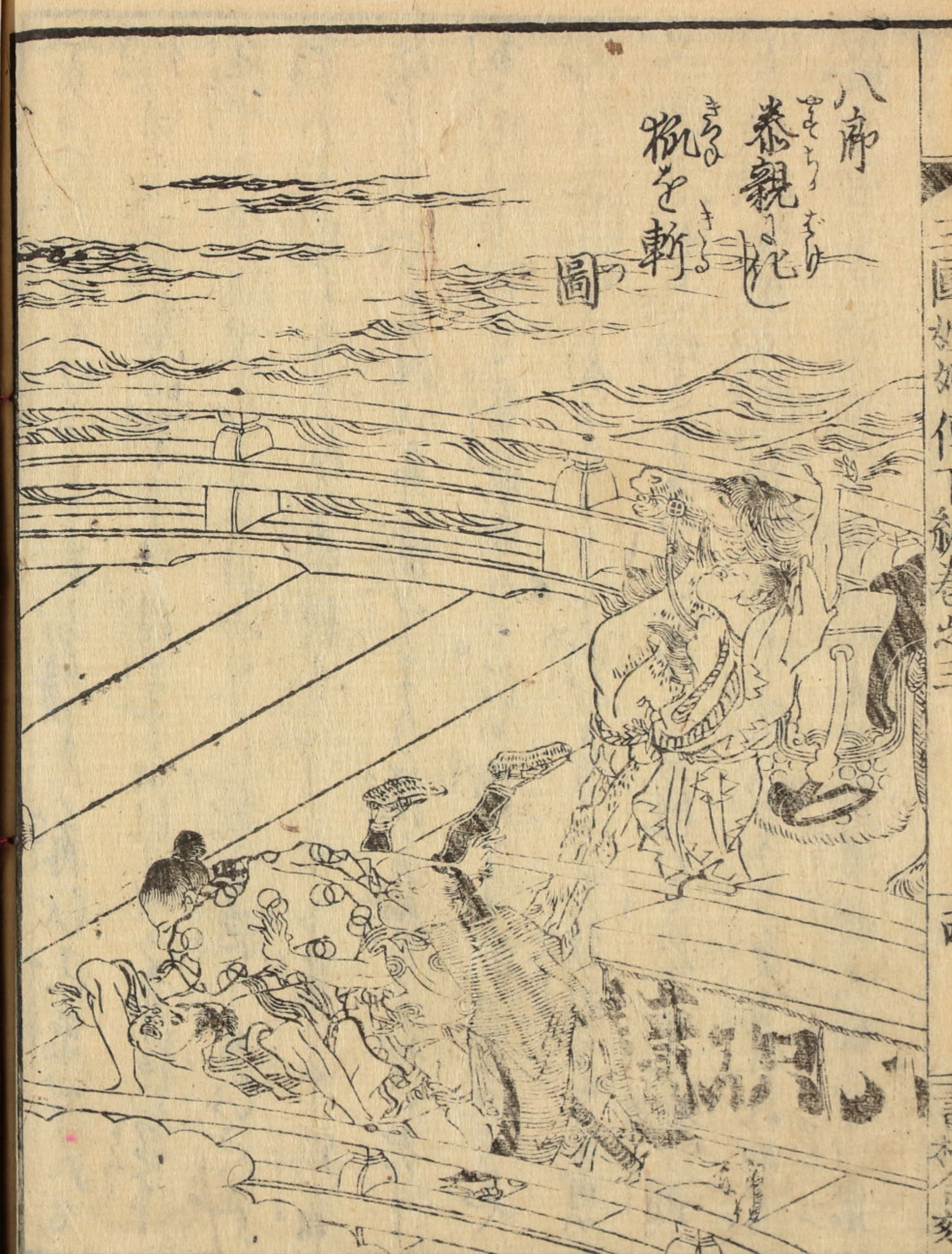
書本合刊

とくふ家あめされども怪異化生の障界のどくとり達
 されよふあく悪極不測の神通を得るもいそ神鏡の
 うりよ迎来るもあやんやそれを奮いとうんと功致し
 かも畜生やればそれまでふいお付らりやまほしく是も恭親を
 ぶけり古瓶をふりてさうふふは日恭親深切をりゆ
 我はあそり山鳥の尾の翁十之掛ひしあややく思ふ
 どのはそれを輪よあひ取きふれが正躰又やかくあひあは
 持方うりて懐中せり是紙中へ密にうへてあひあは
 ちりえれり面を則極あり悟りやゆふ今一度神鏡の写
 りてさうりてさうんとさあぬてふあそ被にひしはくぐ

おりばをき修をわく一某あまうり再びと系せんも
 渡ひし家事もあひて修末あはるのうまはまは只ト
 途中の労役やいひあひびふてび赴き渡りあひて
 なるんと馬よりりれば恭親も甲も馬を修め
 だりしあまうり阿八郎懐中より溢るる物あひあは
 角櫃あひけを恭親あんと改め渡さるるあひあは
 櫃のまゝ渡さるるあひあはあひあはあひあは
 さればあまうりあひあはあひあはあひあは
 口にあまうりあひあはあひあはあひあは
 通りゆりて呈せんと思ふこととは恭親大切の御事



八帝
 恭親
 杖を斬
 圖



西宮の文をくも今こころと思ふはま中同道のひびきまゝに星せ
のまゝにそとにいと俄に書り詞と面色ももも書じと八節の帯せ
刀抜もももせだ一討と切付れは通力自をほへ一古振死はして
仍来も又之にけり清きととくせまなり八節の逢中の事なりけり
物ぞとあはれあつた大岡白殿下とんと長崎素弾正少助方へ
使をいりてつじにいとけり古くもかき一節内はわかれが事いえのどく
そ人あり百姓の害せま書も止らるおちあちあ順内安徳
勢儘下り実を新わき一夫に海を知りぬる百家の君れはあ
有がくくそと書かへ

繪本三國妖婦傳下編卷之三終



